

# 栃木県山岳連盟 海外委員会

## 「海外登山技術交流会 2016」報告書



日時 2016 年 6 月 18～19 日(1 泊 2 日)

記録 久我隆泰

海外委員会参加者：久我隆泰、久我絵美（18 日懇親会・19 日訓練のみ）  
古市卓也、平川竜士（18 日山行・懇親会のみ）  
海登研からの参加：小松原政彦（18 日懇親会・19 日訓練のみ）、  
笹沼高夫、渡邊愛理、横田篤史

## 1. 前書き

海外委員会の恒例行事となっているマチガ沢東南稜登攀、マチガ沢雪渓上での氷河上でのセルフレスキュー訓練を行う海外登山技術交流会ですが、今年は岳連 70 周年記念登山（以下、70 周年と称す）に向けて動き出している海外登山研究会（以下、海登研と称す）との合同行事として企画し、4 名（小松原さん（ホンダ山岳部）、渡邊さん（ホンダ山岳部）、笹沼さん（宇都宮白峰会）横田さん（小山山岳会））をお招きして開催しました。

海外登山技術交流会は、例年よりも 70 周年（7000m 前後の高所登山）を意識した設定となりました。

初日のマチガ沢東南稜登攀は 12～13 時間行動を想定。マチガ沢雪渓から東南稜登攀まですべてアイゼンで登攀し、本スケジュール内に登って下りてこななければならないというレベル設定をしました（自信がない参加者のフラットシューズの利用は妨げない）。

最終キャンプから 7000m のピークを目指す際に、立ち止まって休憩等はできないことから、今回も休憩は取らないことを宣言し、高所登山を意識しながら登ってほしいとメンバーに伝えました。各自、水分や食料を歩きながら摂取し、休憩を挟まなくても登頂できるペース配分を考えてもらうことが狙いです。

また、今回は東南稜に取り付くタイムリミットを取付到着 11 時と自分に課し、間に合わない場合のメンバーの態度や言動もチェックしようと決めていました。

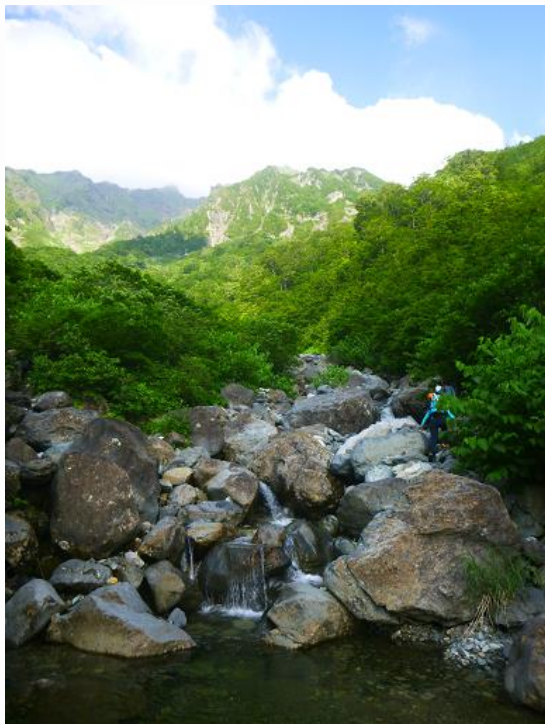
翌日の訓練は 70 周年に必要な技術に特化して行いました（国内の冬山に必要な技術は別委員会の研修や講習に任せる）。

## 2. 山行記録（6 月 18 日・快晴）

ルート：登山指導センター～マチガ沢出合～巖剛新道からマチガ沢入渓～東南稜取付（敗退判断）～マチガ沢直上にルート変更～谷川岳トマの耳～巖剛新道～マチガ沢出合～登山指導センター

装 備：登攀道具一式、冬靴、アイゼン、ピッケル他、一般縦走装備

参加者：久我隆(L)、古市(SL)、平川(SL)、笹沼、渡邊、横田



予定通り出発し、マチガ沢入溪。出だしは沢を遡行し雪溪を目指したが、



いつまで経っても雪溪が出てこない。30 分ほど遡行して、今年のマチガ沢には過去に経験のないほど雪がないことが判明する。雪溪がないため、マチガ沢遡行自体が容易でないことをメンバーに伝達し、意識を高めてもらう。





やっと雪渓が出てきても薄く危険なので基本高巻き。



途中踏める雪渓が一部あったがやらしいのでメンバーの間隔をあけてスピードアップで抜ける。



その後もほぼ高巻き。



最大の難所は、左岸から右岸へルートを転じる際に行った雪渓崩壊地点のトラバースでした。雪渓間際に1本しかルートを見いだせず、そこを急いで抜けることになりました。





50m ザイルを唯一出した地点。アイゼン登攀経験の少ない横田さんのために古市 SL リードでザイルを伸ばした。上に支点にできるようなところはないので、ハーケンを打つか、極小岩角を使うか、腰がらみ肩がらみを駆使する必要あり。平川 SL が横田さんの真後ろにつき、手足の指示をする等して問題なく登れました。

この時点で横田さん以外のメンバーは、アイゼン登攀問題なしとの判断をする。渡邊さんも率先してフリーで登っており、技量もさることながら、メンタルの高さに驚かされる。



その後も何度となく登攀を余儀なくされました。横田さんには、久我隆の装備 10m お助けロープを 3 度、スリングを一度たらしめて登ってもらった箇所あり。平川 SL 曰く「横田さんは当初アイゼン登攀になれていない様子（アイゼンを横に置いてしまう等）が窺えたが、後半は前爪を細かいところに引っ掛ける等して登ることができており、成長を感じた」とのこと。



東南稜取付を見上げて、この時期にこれだけ岩が露出していることは珍しい。結果、取付までかなり時間を取られてしまった。





東南稜取付にメンバー全員が到着したのは11時20分過ぎ。登攀のタイムリミットを11時に設定していたので、登攀しないのは自分の中では決まっていたが、メンバーに意見を求める。

平川 SL「登攀は困難。諦めたほうがいいのではないか」古市 SL「マチガ沢を下りるくらいなら東南稜を抜けたほうがいい」等の意見がでる。

わたしの中には遡行してきたマチガ沢をピストン下降する選択肢はない旨を告げ、東南稜に登るのではなく、マチガ沢本流を直上するのはどうかと提案。皆からの賛同を得、マチガ沢本流直上にルート変更をする。

本来マチガ沢東南稜は3名2班体制ならば、11時30分に取り付いても19時頃には下山できるので、突っ込むことは可能である。現に、過去11時30分から2班で登り出して、19時前に下山したことがある。まだ正午前の明るい最中に東南稜登攀を諦めるのは、本来クライマーとしては残念ではないはず。

しかし、メンバーの誰からも「登りたい」「おれの班だけでも登らせてくれ!」「隊を直上と登攀に分けてみてはどうか?」といった、登りたい我欲の噴出はなかった。これには素晴らしいと感じた。わたしがタイムリミットを30分早く設定していることから分かる通り、今回はそれぞれザイルを組んだことのない未知数のクライマーの寄せ集めの隊。取り付いて何かあってからでは



遅い上、リスクを犯す必然性はなにもない。今回のメンバーは、獲物を前にしながらも、皆それを理解し、正しい判断、冷静な対応ができていたように思う。大半が70周年への参加に意欲をそそいでいる面子である。このメンバーとなら70周年も上手くいくのではないかと期待が膨らんだ。

因みに、横田さんは、他メンバーに比して登攀力は劣ると言わざるを得ないが、山体力は十分に持ち合わせており、今回は休憩を挟まない山行だったにも関わらず、見事にメンバーに付いてきていた。タイムリミットの11時に間に合わなかったのは、けして横田さんにザイルを出していたから等ではなく、雪渓をストレートにつめられるはずのマチガ沢を右へ、左へ高巻いたり、岩を登ったりしていたせいだとここに付言しておく。

この日のルート状況で、取付に11時20分過ぎに到着できたのは、遅いどころか逆に早かったとの認識である。これには古市SLも同意見であった。

閑話休題。平川SLとは同じ山岳会の所属であり勝手知っているため、ルート変更したマチガ沢直上のトップは古市SLに任せることにした。古市SLのルートファインディングやリーダーシップの確認をするのが狙い。自分は後方の横田さんサポートに回る。



マチガ沢直上は、泥壁や草付き交じりをバランシーに登る等、岩登りとは違う技量を求められるルートということもあって、笹沼さん曰く「ここが一番難しかった」とのこと。登りに求められる技術が一変していたのは確か。

トップを任せた古市SLは、上のような技量もあつてか、すいすいと登ってしまい、自分自身で「後方とかなり間が空いてしまったところが反省点」と発言していた。最終的には先行3名はわたしの視界から消えてしまい、何処に行ったか分からなくなってしまっていたので、常にアクシデントが発生する可

能性を想定し、また後ろにルートを示す意味でも、少し待てば後方が追いつく程度の距離感にいたほうがいい。



マチガ沢直上のラスト、東南稜のスカイラインを指さし「本当は登りたかった、登りたかったです」と、わたしの前でだけ無念を訴える平川 SL。

しかし、平川 SL 自身も東南稜は登るべきではなかったと判断しており、その判断に間違いはなかったと自分に言い聞かせていた。クライマーとしてルートを制覇するだけでなく、諦めたり敗退したりした数も強さに繋がるのだと、平川 SL に伝えたい。



12時30分前に全員が尾根に出る。横田さんのみオキの耳が未踏であるとのことだったので、横田さんに自由時間を与えてオキの耳を登頂させ、トマの耳で合流したのち全員で記念撮影。



わたしと平川 SL が所属する宇都宮溪嶺会は、残置にあまり頼らないナチュラルプロテクションに重きをおいて登攀をしているため、カムやナッツ等を豊富に所有し、歩荷することを苦にしていないが、今回のメンバーでナッツキーを卒なく使えるメンバーが他におらず、皆普段からカムも最小限度にしか使用していないとのことだったので、所属山岳会が違えば、登攀形態に関する意識のギャップもかなりあるのだと再認識できた。

文部省国立登山研究所の指導者研修会でもカムやナッツの使い方はカリキュラムに入っているし、雪山の急斜面において、弱点は雪上ではなく、岩やクラックであるとの認識に立てれば、ナチュラルプロテクションを使いこなせてこそその未踏峰挑戦ではないだろうか。ルートにもよるが、70周年に向けて未踏峰挑戦も視野に入れるのであれば、ナチュラルプロテクションの技術を習得しておいて損はない。リードが使えてもフォローが回収できないのでは意味がない。因みに、今回はまったく使わなかったが…。





下山ルートは予定通り巖剛新道を利用し、16時にマチガ沢出合、16時30分前に登山指導センターに下山した。途中、笹沼さんが足を軽く捻挫するというアクシデントがあったものの、大事にはならず全員で自力下山できました。



下山時に偵察した、取り付くはずだった東南稜ルートと変更して登ったマチガ沢直上。70周年に向けて、このルートを18時前には下りてこられるような体力と技術を身に付けられると心強い。65周年記念登山は準備が足りず、東南稜取付にも届かず敗退となった。70周年では、このルートを時間内にアイゼンで登れるような意識で各自トレーニングされたい。メンバーの人柄、隊の雰囲気、技量、やる気については申し分なく、とても楽しい山行となった。70周年でも、こういう隊を組むことができれば、展望は明るい。

### 3. 懇親会（6月18日）

参加者：久我隆、久我絵、古市、平川、笹沼、渡邊、横田、小松原  
飛び入り参加：野村光男（氏家楽稜）、西尾美代子（氏家楽稜）



夜から小松原さんが加わり、天神平スキー場駐車場 1 F にて懇親会を開催した。皆のアルコールの差し入れに、炊事担当の久我絵委員が準備してくれた料理で、深夜 1 時 30 分まで宴は続いたそうである。最後まで残ったのは、小松原さん、渡邊さん、平川さんの 3 名。わたしは早々と就寝とし、からきし弱かった。

また、翌日の沢登りのために谷川入りしていた、氏家楽稜の野村さんと西尾さんが合流してくれ、鍋料理や多くの差し入れをして下さりました。翌日は朝早く出発されたので、ちゃんとお礼を言えず申し訳ありません。大変助かりました。ありがとうございます。

谷川岳周辺での屋根のある屋内での火器類の使用が問題となっている。土合駅は待合室が夜間閉鎖となり、解放されている屋根のある屋内は、定期的に見回りがされている。駐車場係員からも火器を使う際には外でするようにと事前に一言頂いた。昔懐かしき山屋の時代と今は違う。自分の首を絞めないように、火器類はルールを守って外で使用するようにしたい。

#### 4. 氷河上でのセルフレスキュー訓練 (6 月 19 日)

場 所 : マチガ沢雪渓上から山岳資料館前駐車場に変更

参加者 : 久我隆 (指導)、久我絵、古市、笹沼、小松原、渡邊、横田



国内の雪上技術は、他委員会の講習会等に任せることとして、今回は高所登山、特に 70 周年を意識した技術の伝達に注力した。今回教えなかったことの中にも、雪上歩行 (キックステップ、アイゼン歩行他)、ピッケルワーク、滑落停止、雪上での確保、雪上でのアンザイレン、スノーアンカーの作り方、といった技術は必須です。各自練習されたい。

今回は上記の中から、ヒマラヤでよく使うことになるスノーバーの基本的な使い方のみ口頭にて説明した。（埋める角度、埋める向き、硬雪と軟雪との関係 etc）。

フィックスでのルート工作の仕方を口頭で説明し、その上で、主題のクレバス帯に関係する知識と技術の話に入った。まずは、国内雪山でのアンザイレン法と氷河上でのアンザイレン法の違いを言及し、アンザイレンの人数に応じて必要な技術（バタフライノット）等を実践し説明した。



続いて、氷河上でのセルフレスキュー、クレバス脱出法、クレバスからの救出法等をアンザイレンの人数に応じて行えることが違ってくことをふまえながら、各場面で必要な技術の実践練習をした。3分の1のメリット、デメリット、2分の1のメリット、デメリット、トップやアンカーが落ちた場合とミドルが落ちた場合の違い、自力で登り返すシステムを事前に作っておくという考え方や、滑車を1つ持っていることの有効性、氷河上のセルフレスキューを適切に行う際に、個人がどれだけのギアを所持している必要があるか考えておく必要がある旨を伝えた。





氷河上で必要な知識に特化して簡潔に教えられたものと思う。皆、意欲があり、実践も率先して行ってくれて大変助かった。

但し、今回のような知識や技術力では、雪溪上に行ってもなかなか訓練ははかどらないものとする。夏冬２回に分けて海外登山技術交流会を開催し、知識と技術の定着を図り、教える側、教わる側のスキルアップが求められるものと考えます。

具体的には、2016 年度中に海登研との合同企画として、海外登山技術交流会（冬）をイベントとして開催し、問題がないようであれば、来年度から海外登山技術交流会は夏冬２回開催にしたいと考える。海外委員会内にて鋭意検討準備していき。



## 5. まとめ

今回はたいした知識も経験もないわたしが取りまとめ役となって2日間にわたり指揮指導することとなりましたが、最近まで指揮され教わる側だったからこそ分かる気持ちというのがありますので、それを大事に行事進行できていたなら幸いです。今年は参加者の平均年齢が38.75才。一昨年は50.14才、昨年は47.3才ですから、異例の若返りとなりましたが、栃木県には多くの熱いクライマーがおり、世界に目を向けていることに改めて思い至りました。

所属している山岳会自体は、それぞれやっている山のジャンルが違えば、使っている技術や知識も違う。だからこそ、所属山岳会の枠を超えて、世界の山に挑戦したいと考えるクライマーの受け皿になることこそが、栃木県山岳連盟や海外委員会の役割だと思います。

これからは高所登山の知識の吸収や技術の定着に重きをおき、70周年に向けて海登研と連携を図りながら、海外委員会を一層活発にしていけたらと考えています。そのためには、先輩方のお力や実体験の伝達も重要だと考えていますので、いかに諸先輩方から知識や経験を引き出す場を用意できるのかというのも、大事な海外委員会の役割だと思います。やるべきことは多くありますが、惰性に行事を済ませて終わりにするのではなく、未来につながる行事にしていけたらと考えています。今回はその第一歩になっていればいいのですが。

最後になりますが、今回、海登研から参加してくれた皆さまありがとうございました。70周年と言わず、また一緒にどこかで定期的にザイルを組みましょう。そして冬にまた海外委員会のプレ行事が開催できた時には、是非ご参加ください。お待ちしております。

以上